営農レポート
Niigata
令和６年８月１日
発行：JA／JA全農にいがた

# 水稲刈り取り後の秋耕のすすめ

６年産水稲は前年同様に出穂が早まり、収穫時期も近くなってきました。水稲を刈り取った後の稲わらを早めにすき込むことは、稲わらの分解が進み、水田の地力を高めることや翌年のワキの発生を抑制することができます。秋耕のポイントについて説明します。

## １．なぜ秋耕をすることがよいのか

稲わらは有用な有機物資源です。図１のとおり稲わらの秋すき込みを長期間実施した圃場では、高温年でも安定して収量が高く、堆肥施用と同等の効果が期待できます。

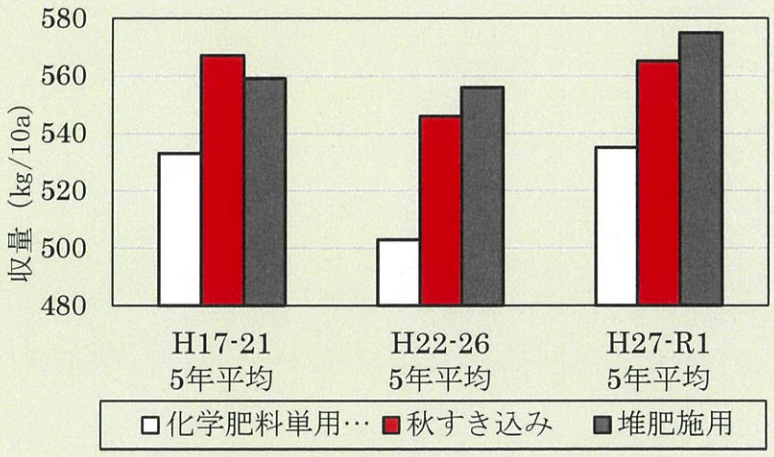


図１　有機物長期連用による収量推移
（新潟県水稲栽培指針より）

## ２．秋耕はいつするのが最適か

稲わらの分解は、地温 15℃以下になると、分解する微生物の活動が低下するため、地温の高い１０月中旬までに秋耕することが望ましいです。

収穫がすべて終了するのが、１０月上旬になってしまうと秋耕作業できる期間が限られてしまいます。そのため、早生品種はコシヒカリの収穫前に実施したり、コシヒカリの収穫中でも小雨で収穫ができないときや朝露が消えない午前中に実施したりすることで、稲わらの分解が早くなります。

また、秋すき込みは春すき込みに比べると、図２のとおりメタンの発生や根腐れの原因となる硫化水素の発生を抑えることができます。

（次頁に続く）

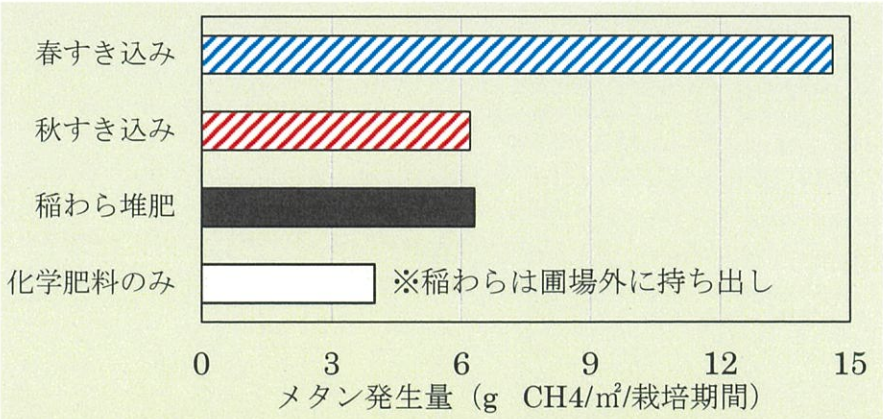


図２　水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響
（新潟県水稲栽培指針より）

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

## 3.　秋耕は浅く耕起する方がよい

すき込みの耕深は、微生物への酸素供給や地温上昇の関係から、5～10cm の浅い耕起が望ましく、作業スピードも速くなります。表面の稲わらが乾燥すると分解が遅れますので、稲わらがまとまった部分は周りに散らかして、土壌と十分に混和してください。

また、滞水する圃場はサブソイラーの施工や排水溝を作り、排水を促してください。

## 4.　稲わら分解促進資材の利用

作業の遅れ等で 10 月下旬以降に秋耕になるときは、次の表に示す稲わら分解促進資材を利用してください。今年、ワキの発生が多かった圃場は、地温の高い 10 月中旬までに散布すると効果がより高くなります。

使い方は、稲わらに直接かかるように散布してください。雨の日の後など、稲わらが湿った状態が効果的です。散布後はできるだけ早く土壌にすき込んでください。

詳しくは、８月号の「秋の土づくり」で特集していますので、参照してください。

表　稲わら分解促進資材

| 資材名 | 容量 | 形状 | 10aあたり<br>施用量 |
|---|---|---|---|
| ワラ分解キング | 10kg | 顆粒 | 10kg |
| アグリ革命 | 2kg | 細粒 | 2kg |
| アグリ革命アクア | 100ml<br>500ml | 液体 | 100ml<br>(希釈して使用) |

（担い手・営農支援部　担い手・営農支援課）

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。